０４／０２／１５　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：様々な罪の根源
聖書箇所：コリント人への手紙第一　４章６－１３節

私たちは毎日の生活の中でいろいろなことにイライラしてしまいます。「なぜ、こうも思い通りに行かないのだろう！」とか、「自分の意見が絶対に正しいのにどうしてあの人たちはわからないのだろう！」と思ってイライラするという経験はだれしもあることですが、それが毎日ほど続くとそのような状況から早く解放されたいと願います。今から２０００年前のコリント教会がちょうどそのような状態でした。教会の中に分裂分派の問題があり、それゆえに、教会全体が大きく混乱していたのです。パウロは何とかそのコリント教会の問題を解決しようとして教会のメンバーたちにメッセージを送るのです。

前回、４：１－５から学んだこと、それは、神が私たちクリスチャンに与えてくださるものとは、（１）新しい身分、（２）新しい働き、（３）神の報い、でした。ここで私たちは、パウロが自分自身を神の目から見たときにどのような存在であるかということを見ました。パウロは自分は神によって救われ召されたゆえに、

１．神のしもべである。＝ゆえに神に対して「仕える者」、つまり、神に忠実でなければならないと教えます。これは神が与えてくださる「新しい身分」です。
２．神の奥義の管理者とされた。＝神からのメッセージを託されました。新しい身分が与えられたゆえに「新しい働き」も与えられたのです。
３．いつか必ずさばきがある⇒神から新しい働きが与えられたゆえに与えられる「神からの報い」です。

これらの教えは、パウロやアポロなど教会のリーダーにだけ教えられていることではありません。コリント教会の人たちもそして、私たちもこれらのことを覚えることによって、神に忠実であるようにと教えられているのです。かつて私たちは罪の奴隷でしたが救われて義の奴隷とされました。ローマ６：１７－１８**「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、:18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」**と、これが「新しい身分」です。また、神からのメッセージは私たちにも託されています。神の救いをいただいている私たちは、自分が信じたそのメッセージを語ることができます。Ⅰペテロ３：１５**「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」**そして、クリスチャンに対する神のさばきは罪による永遠のさばきではありませんが、この地上の歩みに対する報いです。Ⅱコリント５：１０**「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」**。この「さばきがある」という教えはクリスチャンにとっては大きな恵みでもあります。それは、神が究極的に正しいさばきをしてくださることは、私たちを正しい方向に向かわせるからです。神は私たちを救ってくださるだけでなく、常に私たちの弱さを知って必要を備えてくださっているのです。

しかし、このすばらしい恵みを台無しにするものが私たちのうちにあります。それは「高慢の罪」です。今日は続いて６節からこの「高慢」の罪が私たちのうちにどのような問題を引き起こすのかということについて見てゆきましょう。そして私たちが、自分自身の高慢の罪をしっかり見つめることによって、より神に喜ばれる歩みを為し、揺るがない平安と喜びをもつことができる者になることを願います。

★高慢の罪が引き起こすものとは？

１．私たちを王さまとしてしまう。　　６－９節

「さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言って来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない。」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。:7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。:8 あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。:9 私は、こう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。こうして私たちは、御使いにも人々にも、この世の見せ物になったのです。」

★「私たち抜きで、王さまになっています。」

８節でパウロは**「あなたがたは、…私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。」**とコリント教会の人たちに皮肉を込めて彼らの問題点を指摘しています。その問題は彼らの高慢です。それこそが教会にある分裂分派の原因なのだとパウロは指

摘するのです。パウロとアポロには神から託された特別な務めがありました。それは神のみことばをより多くの人々に伝え、救われた人たちをみことばによって教え導くことです。この務めのために彼らには神の「しもべ」であることが要求されました。「しもべ」とは「仕える人」です。前回見たように、この「しもべ」はガレー船の最下層でオールを漕ぐ人のことでした。実際にパウロはそうでした。彼は何よりも神に仕え、大胆に神のメッセージを語ったために多くの迫害に遭い、いのちをも失いかねないほどでした（使徒１４：１９**「ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」**）。パウロだけでなく、特にこの当時、神に忠実に従おうとする者たちは様々な迫害に遭いながらも、神にまた人々に仕えて行き、何人かは殉教して行ったのです。これは今も同じです。程度の差はありますが、私たちが神の前に忠実に歩もうとすると、この世の中との摩擦や反発を経験します。Ⅱテモテ３：１２に**「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」**とある通りです。

しかし、コリント教会の人たちは、パウロやアポロが自分たちの益のために、成長のために労してくれていることに少しの感謝もなく、自分のために利用し、教会の中で横柄にふるまっていたのです。まさに、すべてを所有し支配している王さまのようです。彼らは聖書の教えがよく分かっていなかったのです。だから、パウロは自分たちのことを話すことによって、彼らにも学んでもらいたかったのです。**「書かれていることを越えない」**と、自分たちの分を越えてはならないと言います。コリント教会の人たちは、神のみことばよりも、自分はどのリーダーにつくか、どの人が自分により多くの利益を与えてくれるかということとか、絶えず人と自分を比較して互いに反目し合うような状態でした。みことばをしっかり学んで神に忠実であるようにと、それはあなたがたが「高慢」にならないためだと６節で言っています。

そして、７節ではあなたがたは何一つ神から与えられなかったものはない、そのことを覚えなさいと言います。ヨブ記を見ると、ヨブはすべてを失った後、それでも神を礼拝したことが記されています。ヨブ記１：２０－２２**「このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、:21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」:22 ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。」**。そして、２：１０には**「しかし、彼は彼女に言った。「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか。」ヨブはこのようになっても、罪を犯すようなことを口にしなかった。」**とあります。パウロはすべては神から与えられることを知っていたから「**あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。**」と言うことができたのです。実際に、私たち人間は自分だけでは何もできません。私たちが生きて行くために必要なものを神が備えてくださっているから、私たちは毎日無事に生きて行くことができるのです。今、牛肉や鶏肉などの問題が起こっていますが、神がほんの少し気候を変えるだけでたちまち食料難に陥ってしまうこともあるのです。

★本来、クリスチャン（教会）とはどうあるべきか？

神と人とに仕えるべき存在です。８，９節には本当の信仰者のすがたが書かれています。神の前にへりくだることです。しかし、コリント教会の人々はそうではなかったのです。教会は自分自身を主張するところであり、自分の誇りを満足させるところだったのです。パウロはエペソ５：２１でも**「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」**と言っています。ペテロはⅠペテロ４：１０で**「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」**と言っています。また、イエスも教えておられます。マタイ２０：２６**「あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」**、２３：１１**「あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。」**

このように高慢の罪は、自分を偉いと思わせ、人を自分に仕えるように仕向けるのです。そして、信仰者のあるべき姿を見失ってしまい、自分の怒りや要求が当然であるとし、引いては神への不平不満となってしまうのです。

２．私たちを賢い者としてしまう　　１０ａ節

「私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。」

本当は賢くもないのに、何も分かっていないのに「自分は正しい、よく分かっている」と思わせるのです。

★「あなたがたはキリストにあって賢い者です。」

これもパウロの皮肉です。私たちは自分が愚かであるとは認めたくない、賢い者と思いたいのです。自分の間違いはなかなか認められない者です。これこそがプライド、高慢です。人が初めて罪を犯した原因も、また、サタンの初めの罪もこの「高慢」でした。

★人（アダムとエバ）はどのように罪を犯したでしょう？

創世記２～３章に書かれていますが、いくつかを見てゆきましょう。

創世記１：３１**「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。」、**

２：９**「神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。」**

２：１６－１８**「神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」:18 その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」**

３：１**「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」**

３：５**「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」**

３：６**「 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」**

彼らは神から最高の環境が与えられていたにも関わらず、それ以上を願ったのです。自分の願いを神のみこころよりも優先させたこと、そして、何よりも神のことばを疑ったことが致命的でした。サタンの誘惑、「あなたが神のようになり、」は巧みです。エバの関心はここから間違った方向に行ってしまったのです。また、罪とは決して行動に至った段階で初めて成立するのではありません。アダムとエバが「善悪の知識の木の実」を取って食べた瞬間、それではなく、彼らが神のことばに疑いをもったとき、ここでもう罪を犯しているのです。

★サタンはどのように罪を犯しましたか？

イザヤ１４：１２－１５**「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。:13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。:14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』:15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」。**

サタンは自分に与えられていた地位や身分では満足できず、自分にはもっと高い地位、より上の身分が与えられてしかるべきであると考えたのです。私たちも自分に対する人の評価を高めたい、自分の待遇をより上に、と願わないでしょうか？

★神にとって高ぶりの罪ほど憎むべきものはない！

みことばを見ましょう。

詩篇１０１：５**「陰で自分の隣人をそしる者を、私は滅ぼします。高ぶる目と誇る心の者に、私は耐えられません。」**

詩篇１３８：６**「まことに、主は高くあられるが、低い者を顧みてくださいます。しかし、高ぶる者を遠くから見抜かれます。」**

箴言６：１６－１７**「主の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。:17 高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、」**

箴言１６：５**「主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。」**

箴言１６：１８**「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」**

箴言２１：４**「高ぶる目とおごる心――悪者のともしびは罪である。」**

イザヤ２：１７**「その日には、高ぶる者はかがめられ、高慢な者は低くされ、主おひとりだけが高められる。」**

ヤコブ４：６**「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」**

悲しいことに、人を救う聖書の知識が人を高慢にしてしまうことができます。１０節を見ると**「私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。」**とありますが、実はこの箇所の前半「キリストのために」はディア・クリストンとあって、理由や目的を表わしているのです。キリストのことを思って、イエスが喜んでくださるから自分は愚かになっているという意味です。そして、後半の「キリストにあって」はエン・クリストーとあって、原因を表わします。キリストによって、イエスが語ってくださったみことばによって賢くされたという意味です。確かにその通りです。私たちはイエスが語ってくださったメッセージによって、本来なら決して知り得なかった様々なことを知りました。コリント教会の人たちは知識において豊かな者でした。Ｉコリント１：５**「というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。」**とパウロは言っています。しかし、彼らはその豊かな知恵、理解力や洞察力を自身の成長のためではなく、自分を誇るものにしてしまったのです。彼らの高慢を助長させたのです。

３．私たちを強い者としてしまう　　１０ｂ－１３節

「私たちは弱いが、あなたがたは強いのです。あなたがたは栄誉を持っているが、私たちは卑しめられています。:11 今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません。:12 また、私たちは苦労して自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福し、迫害されるときにも耐え忍び、:13 ののしられるときには、慰めのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです。」

実際に大したことはできない弱い者なのに、「自分でできる」と錯覚し、神に頼ろうとしないで、自分自身で、自分の方法で行動してしまうのです。

★「あなたがたは強いのです。」

これもパウロの皮肉です。自分の力で聖くなれる、自分の力で自分自身を救えると思っている人。本当の自分を知ったクリスチャンはそれがどれほど愚かで不可能なことかを知っているはずです。けれども、ともすれば私たちはそれを忘れて、自分の力でしようとするのです。そこには神のすばらしさが現わされることはありません。だから、神はあえて私たちに問題を与え、試練を与えて、私たちが神に頼るようにされるのです。私たちの生活はいつも順風満帆であるとはかぎりません。困難な中でも神は助け、力を与えてくださるのです。コリント教会の人たちはクリスチャンでありながら、まるで未信者のような歩みをしているとパウロは言います。３：１－４をもう一度見ましょう。**「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。:3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。:4 ある人が、「私はパウロにつく。」と言えば、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。」**

ある資料によると、この当時、コリントの町には自由人の２－３倍の奴隷たちがいたようです。ということは人々は多くの奴隷を使って自分は労働しないで生きていけたのです。１１－１３節に書かれているパウロの生き方と比較してください。**「私たちは苦労して自分の手で働いています。」**と、あなたがたの裕福さとどちらが強いか！とパウロは人々に迫っているのです。

★本当の強さとはどのようなものでしょう？

それは、パウロのように迫害の中にあっても、みことばを実践することです。パウロはローマの市民権をもっていながら、自分の手で働き（天幕作り）、伝道していました。パウロの生き方はイエスが模範であることが分かります。マタイ５：４４**「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」**、ルカ６：３５**「ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。」**と、イエスはそのように教えられました。それをパウロはしっかり実践したのです。９節に**「神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。」**とありますが、自分たちはそのような者であるとパウロはへりくだって言うのです。

高ぶりの立証

・私たちは他の人の成功や自分に勝る能力を心から喜ぶことができるでしょうか？
・人からひどいことを言われたとき、どのように感じるでしょう？
・人から批判された場合はどうでしょう？即座に自己弁護に走らないでしょうか？
・劣等感も、自分が受け入れられないことに傷つくという高ぶりの一種です。

高ぶりの治療法

・神の目から見たありのままの自分の姿を知るとき、高ぶりの根拠は破壊されます。
・私たちは自分を、完全なお方であるイエスと比較してみるべきです。
・私たちが変えられるのは「御霊なる主の働きによって」です。

パウロは、行列の最後尾（これは戦いに負けた国の兵士たちです）であっても、希望を失いませんでした。